甲斐の金山から　平成12年3月30日　第12号

資料館だより

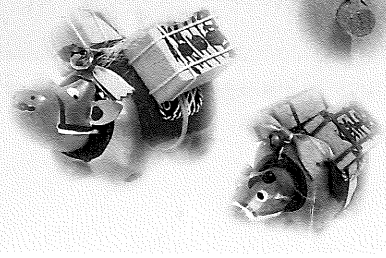
国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館報

奥 隆行 コレクション展

第2回特別展　平成12年4月1日(土)～5月7日(日)
郷土玩具 ～金の彩り～

第3回特別展　平成12年5月13日(土)～6月11日(日)
民話と玩具たち



甲斐黄金村 湯之奥金山博物館

◆主　催／甲斐黄金村・湯之奥金山博物館／下部町教育委員会
◆休 館 日／水曜日(祝日の場合はその翌日)
◆開館時間／九時～十七時(受付は十六時三十分迄)

博物館は学びのオアシス
下部町民の「学び・憩い」の場所として

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館 館長　谷　口　一　夫

「湯之奥金山資料館」は、4月1日から「湯之奥金山博物館」に館名が変更されます。

すでに当館は登録要件をすべて兼ね備え、公立博物館として登録されている資料館ですから、改めて博物館になったことでの追加要件はありません。

しかし、この名称変更の「効果」には期待されるものがたくさんあります。

当館は開館以来3年で5万6千人という有料入館者を迎えていますが、「学習」目的で入館された多くの皆様が満足されている姿を拝見してきました。

また、「観光」目的で来館された方でも、比重選鉱による体験学習（砂金採り）などに挑戦、ほとんどの方が夢中になり、30分という時間が一瞬にして経過してしまうほど熱中されている様子です。

なかには、延長料金を支払って、さらに30分という楽しみ方をしている方もあります。

この砂金採りは我が国古来の金採掘技術であり、「ゆり板」という道具を使って採金するものですが、今では道具が「パンニング皿」（米国の特許製品）に代わっても、全く同じ原理でやるものです。

このように「学習」「観光」としての使い方に加え、町民の皆様が「自慢」したり、「憩い」の場にしていただく利用の仕方があります。

親戚の方を案内してくるとか、無尽の仲間がグループで立ち寄るとか、一杯のお茶だけでも、トイレを利用されるだけでも、私たちはどういう楽しみ方でも十分だと思っています。

先般、NHK甲府放送局の林晏宏記者が取材にみえ、「いつ来て見ても、おざなりでない、しっかり展示構成が組み立てられていて、本当に金山史研究をはじめ、歴史の勉強もできる館ですね。半日とか1日かけても飽きない施設です。」とコメントを残されました。たいへんうれしい言葉でした。

また、多くの県内各地の入館者が、「下部町の資料館」ということで、もっと別のイメージで来たけど、「これはすごいや」という声もあり、これは下部町民すべてが喜んでいいことだと思います。

さて、本号へも「私の研究ノート」を掲載してありますが、寄稿者の高岡伸五さんは全くの素人でしたが、今では金山史研究に没頭しています。

静岡県富士市からほとんど土曜日ごとに来館し、当館を学習拠点として利用しています。

そして、仕事の合間には図書館通いをしています。

館へ来て映像シアター、ジオラマ展示室、さらには現物（考古・民俗）を展示した資料展示室などを見ていると、自然に16世紀戦国時代の金山の世界へと誘導されます。

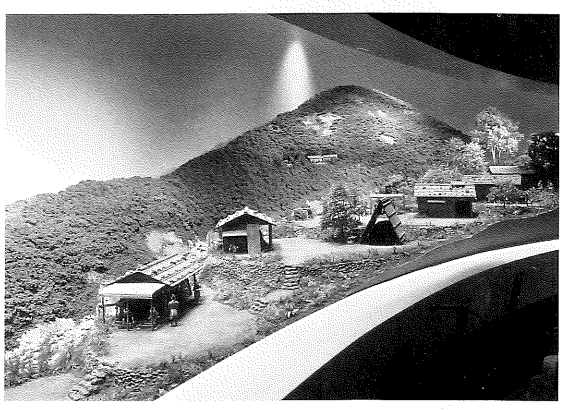
歴史事実を伝える「本物」に接することが歴史研究の基本ですし、下部町に遺された金山の歴史を知る一番の近道です。

館の展示構成は大人に限らず、児童・生徒・学生、いずれの目線からでも、見る人の位置で学習できる特徴があります。

そういう場所が「博物館」です。「資料館」から「博物館」、決して敷居が高くなったわけではありません。

町民の皆様、御家族で「学習」や「体験」にお出かけください。そしてこの「博物館」を「自慢」してください。

町外へ県外へ自慢できる博物館です。



ジオラマ展示室

館からのお知らせ

館名が「博物館」に変更されます。

当館は、あと1箇月ほどで開館満3年を迎えます。

これまでにお迎えしたお客様は、北は北海道から南は沖縄まで、日本各地から5万6千人を数えます。

これらの方々から、激励のことば・御指導・御協力をいただきました。

これを励みとして、開館からこれまでの間、企画展や特別展の開催、遺跡見学会の開催、公開講座の開催、館だよりの発行、金山史研究（第1集）の刊行など、いくつかの事業に携わってきました。

こうした実績は他の大規模な博物館と遜色なく、多くの方から、施設と活動にふさわしい「博物館」に改名すべきだという声が寄せられました。

このため、平成12年第1回町議会に名称変更のための議案を提案していたところこれが議決され、4月1日から「甲斐黄金村・湯之奥金山博物館」と名称が変更されることになりました。

今後も館の使命を忘れず、館のもつ機能が十分発揮されるよう最善の努力を傾注する所存ですので、御指導と御協力をお願いいたします。

ホームページを開設しました

当館のホームページが開設されました。

施設の紹介や金山での作業など、展示に関するものを載せていますが、新情報も入手次第ページ更新するなど内容の充実を図っていきますので、覗いてみてください。

アドレスは、次のとおりです。

http://www2.town.shimobe.yamanashi.jp/kinzan/

活動報告

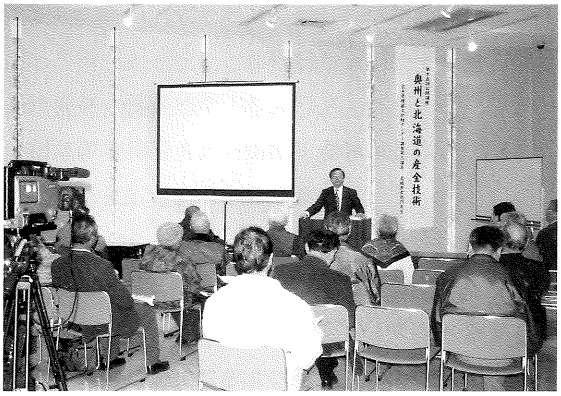
1　公開講座終了

平成11年度の公開講座は、「鉱山技術史的にみた湯之奥金山」というテーマにより開催されてきましたが、その全講座が2月に終了しました。

第3回目までの講座内容については、資料館だより第11号によりお知らせしましたので、今号では第4回講座及び第5回講座についてお知らせします。

第4回講座は1月22日に開催され、兵庫県妙見山麓遺跡調査会の神崎　勝調査主任をお迎えし、『兵庫妙見山麓遺跡にみる精錬遺構と技術～考古学調査から～』と題しお話ししていただきました。

精錬技術の第一人者である神崎先生は、「ここ湯之奥は金山ですから、金山での精錬技術についてお話しすればよいのですが……」と気になさりながらも、御自身が調査に携わっている妙見山麓遺跡についてお話しされました。まず、精錬の予備知識として、金以外の金属は酸化しやすく、再び分離しにくいというような金属・鉱石の種類や性質などを踏まえながら、例えば、鉱山作業の現場では選鉱後の「焙焼」があり、他の地域の金山でもこの「焙焼」と同時に鉱石を焼く作業があるが、金・銀・銅山それぞれにおいては、一見同じ作業でも、その性質や目的が異なることもあるということなどを付加しながら、妙見山麓石垣山遺跡からみる精錬工程を各項目においてお話しし、



第5回公開講座

また、遺構の様子はスライドで映し出しながら細部にわたって説明されました。

第５回講座は２月19日に開催され、岩手県埋蔵文化財センターの高橋與右衛門調査第二課長が『奥州と北海道の産金技術』と題しお話しされました。

これまで数多くの遺跡調査に携わってこられた先生は、金山にはいろいろな伝承や伝説が残っているけれども、実際にその遺跡を発掘してみるとはっきり分からないのが実状であるが、こういうものは地元の人々と接しながら地道な調査を重ねていかないと、なお、解明されないし残されていかないものであることなどをお話しされました。

昨年10月から、月１回のペースで５回にわたって開催された公開講座も、県内外から多くの方に御聴講いただきました。

公開講座は金山史研究の一助として、今後もテーマを変えながら開催します。

その都度館だよりでお知らせしますので、御聴講ください。

2　公開講座等の記録集刊行

資料館だより第11号でお知らせしたとおり、公開講座等の記録集「金山史研究（第１集）平成９年度記念講演と公開講座の記録」を刊行しました。

概要については次のとおりです。

◎書名　金山史研究（第１集）
　　－平成９年度記念講演と公開講座の記録－

◎体裁　Ａ４版134ページ

◎定価　1,200円（友の会会員は１割引き）

◎掲載内容

１　資料館竣工記念講演（講師３人）

湯之奥金山の地質と鉱物

九州大学工学部教授　井澤英二

甲斐の金山と佐渡金・銀山～大久保長安の軌跡～

新潟県立佐渡高校教諭　小菅徹也

湯之奥金山の採金技術

日本鉱業史研究会理事　植田晃一

２　平成９年度公開講座（講師６人）

武田氏と金山～古文書からみた金山衆～

信州大学人文学部教授　笹本正治

日本鉱山史上の湯之奥金山

山梨学院大学一般教育部教授　十菱駿武

湯之奥金山と鉱山技術

帝京大学山梨文化財研究所研究部長　萩原三雄

金山衆の暮らしと信仰

富士吉田市教育委員会係長　堀内　真

文献から見た湯之奥金山・湯之奥村

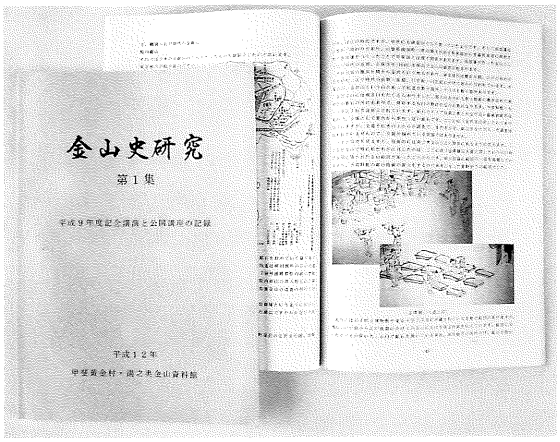
山梨県教育委員会主任　堀内　亨

今後の金山研究と資料館

湯之奥金山資料館館長　谷口一夫

この記録集は当館売店及び下部農村文化公園で販売しております。

また、郵送扱い（送料310円）もいたしますので、御入用の向きにあっては当館まで御連絡ください。



3　運営委員会開催

当館には委員９人からなる「運営委員会」が設置されていますが、新年度事業等について協議するため、去る３月２日に会議が開かれました。

これまでの事業や運営状況等についての報告の後、文化の拠点として町民にどう利用してもらうか、学校の利用をどう引き込むか、体験学習に重きをおいた活動をどう展開するか、観光行政とどうタイアップしていくか、館を中心として温泉と町をどうするかなど、今後の事業や館のあり方について活発な意見が交わされました。

館としてはこれらの貴重な御意見や御提言を受け、設置の目的を再認識し、初心に帰り館運営に携わる所存ですので、今後とも御指導・御協力をお願いいたします。

誌上博物館－シリーズ その9－　露天掘りと坑道掘り

湯之奥金山の操業時期は戦国時代から江戸前期にかけてであるとされています。これらのことは発掘された遺構・遺物により判断することができますが、遺跡に存在する「採掘跡」もまた格好の材料です。

金山や銀山などの鉱山で鉱石を採取することは「金掘」もしくは「鉛掘」と呼ばれましたが、初めのうちは「川金」という形で砂金を採取していました。古代から中世にかけては、気仙沼、本吉郡、東磐井郡などの陸前から陸中にわたる陸奥国が、主要な産金地帯でした。749年（天平21年）2月に陸奥国における初の産金の記述が残されていることは、以前紹介しましたが（第6号参照）、こうした川金採取による産金量の減退が、さらに多くの金を求める人々を山へとかり立てていきました。それに伴って金の採取（掘）方法も大きく変化していったのです。

鉱山での初期採取方法は、風雨に晒され風化した地表近くの鉱脈が山肌に露出した部分を見つけ、その部分を中心に下へ掘り下げたり、溝状に削りとったりして盛んに採掘されていく「露天掘り」から開発されていきました。

湯之奥中山金山や内山金山などの特に尾根付近にはこうした露天掘り跡が集中して存在していますが、中山金山に至っては調査区域だけでも77箇所の露天掘り跡があります。

中山金山露天掘り跡

露天掘り跡は湯之奥だけでなく、他にも黒川金山、牛王院平金山（山梨県塩山市）など戦国時代に端を発する鉱山遺跡にしばしば見られ、さらに長野県茅野市の金鶏金山には無数とも思われる掘り跡が点在しており、甲斐武田氏支配領域内の諸金山をはじめ、特に戦国時代に操業されていた山金開発における初期鉱山、また全国の金銀山の初期採掘場所にその名残をとどめ、山金の初源的採掘形態と同時に、当時の産金の活発な様相を見事に伝えています。

また、山金採掘に限らず、「柴金」と呼ばれた河岸段丘上に埋蔵されている砂金などもこの露天掘りによって採掘されており、安倍・井川（静岡県）などをはじめ、その他各地の鉱山にも柴金採掘の痕跡が現存することから、この採掘法が全国の諸金山で大がかりに行われ、広く応用されていたことがわかります。

しかし、露天掘りで、採掘できる地形は限られてくるためその限界も早く、当然、砂金や柴金が枯渇するにしたがい、次第に深い地中に埋蔵されている鉱脈が追い求められます。やがてこれが本格的な坑道掘りへと発展していくのです。しかしながら坑道掘り自体が未発達の段階では、人が這ってやっと出入りできるような「たぬき穴」と呼ばれるような小さな坑道が掘られていました。湯之奥に残されている16本の坑道には、3m程度の短いものから、40m以上にも及ぶ長いものもありますが、やはり未発達段階における「たぬき穴」もあったと思います。

坑道を深く掘っていけばいくほど、より体系的な掘り方が必要となっていきます。基本的に沢を掘り下げたり、地表をさらったりすることで鉱脈に近づいていく露天掘りは、照明、換気、排水など技術的問題が大きく生じることもなく、さほど難しくはありませんが、表面だけではなく地中深くに掘り込んでいく坑道掘りには多くの危険がともない、また技術的にも高い水準を必要としそのためのコストも高くなります。しかし掘削技術に加えて精錬・選鉱技術の革新により鉱山技術の急速な発達が見られた16世紀から17世紀半ばにかけて、全国の名だたる鉱山は、そのコストを差し引いても余りある金、銀を産出し、最盛期を迎えました。

我が国の鉱山業が世界有数の地位を獲得していった背景には、鉱脈を追いかける鏈押し掘り、そして本格的な坑道掘りへと発展していく過程に見えるように、常に技術革新の流れを受けていた現実があったのです。　（学芸員・小松美鈴）

私の研究ノート②

穴山氏と金山（中山・麓）との関わり

高　岡　伸　五（湯之奥金山資料館友の会会員）

「私の研究ノート」①で、私は富士（麓）金山や湯之奥中山金山の開始時期にふれ、天文20（1551）年には操業が開始されていたことを述べました。その金山へのルートは駿河国「麓」でしたが、三国同盟が信玄により破棄され駿河へ侵攻したことで、今川氏、北条氏は甲斐国への塩止めを行い甲斐国へのルートを遮断します。これを受けた形で永禄11（1568）年に、穴山信君が河内諸役所に対し中山之郷へ出入りする荷物を通過させるよう命じたという経緯についてふれました。これによって中山と麓の金山衆は同一技術者集団ではないかという私見を述べました。

このほど刊行された湯之奥金山資料館の「金山史研究」第１集107頁で堀内亨先生は旧富士郡北山村の市郎右衛門さんに伝わる３通の文書を紹介しています。１通は前出の永禄11年の「中山之郷出入りする荷物の通過…」、２通は元亀２（1571）年の「中山之金山衆拾人に対して、籾子150俵……」、３通は天正11年の「河口六左衛門尉に宛てた棟別諸役の免許……」、　いずれも大切な文書ですから肌身離さず大事にしてきたもの、ということで解説され、文書を所有していた市郎右衛門さんは河口六左衛門さんの子孫にあたる方かも知れませんと云われていましたが、大変重要な部分だと思います。

これは資料館の谷口館長から、２通目の元亀２年文書に「甲州において籾子150俵…」とあり、甲州の武田氏が甲州の「中山之金山衆捨人」に宛てた文書なら「甲州において…」と改めて書くでしょうかとの指摘がありました。中山之金山衆拾人の代表者は少なくとも駿河の人だからこそ「甲州において…」が必要だったのではないか、私もそう思います。

私が最初に興味をもった①操業開始時期、②穴山氏の関わり、③金山衆拾人のルーツについてのうち①③については、概略的ながら少し先が見えてきた感じがしますので、今回は②の穴山氏の関わりをみてみたいと思います。

戦国時代に甲斐国、駿河国など両国にまたがった領域において金山操業が維持できた最大の要因は穴山信君の存在があったからといえます。

穴山信君に関わる文書等について研究ノート①に紹介したものに追加補修したものを今回も列記しましたが、この流れから穴山氏の動向が探れると思います。文書の中には信憑性で問題があるものも含まれているかと思いますが、その点は勉強不足ですので諸先生方のご指導を頂ければ幸いに思います。

穴山氏の動向

武田氏が駿河国への侵攻を開始すると穴山氏は河内地方の安定強化を図るために、文書③の２通の文書を発給、さらに、１年後には文書⑤の「中山之郷へ出入り…」を残すなど、金山衆を積極的にバックアップした様子が伺えます。この時は大きくは武田領国内における河内地方の領主としての穴山氏の存在が伺えます。第１図ⓐがその範囲かとみられます。

その後、文献⑥～⑨に見られる駿河国との戦いに参戦以来、⑨の文書には大宮城（駿河）が穴山信君支配下になっていますが、この永禄12年は、穴山氏にとっても、金山衆にとっても大変緊張が続いた時期と見られます。また、⑪⑫の文書には、中山之金山衆拾人の武田信玄と駿河国深沢城への攻撃に参戦しますが、信玄の深沢城攻撃は甲斐国へ通じる３往還（鎌倉・中道・駿州）の一つ鎌倉往還の確保にあったものとみられます。

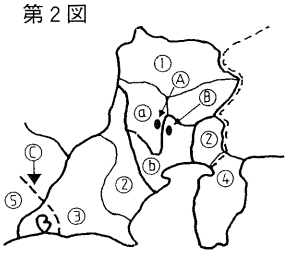
⑯の天正２年文書には、穴山氏が麓の平岡民部丞に諸役を免除しているところから、この時期になると穴山氏の領域が完全に第２図ⓐⓑになっていることが分かります。

直後の⑰の天正３年文書には、駿河国興津穴原間から駿河国江尻に移りますが、江尻にいても⑱の文書にみられるように「麓」との関係は継続しています。

第１図

① 甲斐国（武田信玄）
ⓐ 甲斐国河内領（穴山信君）
② 駿河国（今川氏真）
③ 遠江国（今川氏真）
④ 伊豆国（北条氏康）
⑤ 三河国（徳川家康）
Ⓐ 湯之奥（中山）金山（穴山氏支配下）
⑥ 富士（麓）金山（今川氏支配下）

第２図



① 甲斐国（武田勝頼）
ⓐ 甲斐国河内領（穴山信君）
ⓑ 駿河国（穴山信君）
② 駿河国（武田勝頼）
③ 遠江国（徳川家康）
④ 伊豆国（北条氏政）
⑤ 三河国（徳川家康）
Ⓒ 武田氏最大領国
Ⓐ 湯之奥（中山）金山（穴山氏支配下）
Ⓑ 富士（麓）金山（穴山氏支配下）

私の研究ノート②文献一覧

①永禄10年（1567年８月17日）今川氏、甲斐国への塩止めを行う。（静岡県史「資料編中世３-3410」）

②永禄10年（1567年11月）武田信玄の嫡子義信の妻が駿府に強制送還される。

③永禄10年（1567年12月25日）穴山信君、望月善左衛門尉に新恩を与える。（山梨県史「中世資料編1086　四」）
永禄10年（1567年12月25日）穴山信君、黒桂金山の望月半次郎に名字状を与える。（山梨県史「中世資料編1087　五」）

④永禄11年（1568年２月）武田信玄、徳川家康、駿河進攻に対して同盟を結ぶ。（静岡県史「資料編中世３－3496」）

⑤永禄11年（1568年11月27日）穴山信君、河内諸役所に対し、中山之郷へ出入りする荷物を通過させるよう命ずる。（「判物証文写」附１）

⑥永禄11年（1568年12月６日）武田信玄、駿河国へ侵攻する。（第一次駿河侵攻、第一次大宮城攻撃）・（静岡県史「資料編中世３－3496」）

⑦永禄12年（1569年２月１日）第二次大宮城攻撃。穴山信君、葛山氏元ＶＳ富士信忠、信通（戦国合戦大事典「静岡県編」）

⑧永禄12年（1569年４月19日）武田信玄、駿河国内が平穏に向かいつつあることを徳川家康に伝える。（武田信玄書状「切紙」白崎良弥所蔵文書）

⑨永禄12年（1569年７月３日）武田信玄、大宮城を落として武田氏家臣、穴山信君の支配下に入る。（第三次大宮城攻撃）・（静岡県史「資料編中世４－49」）

⑩永禄12年（1569年12月）徳川家康、武田信玄と敵対する。（新潟県史「資料編３中世」１－910）

⑪元亀２年（1571年１月３日）武田信玄、深沢城攻撃に金山衆を利用する。（静岡県史「資料編中世４－295、304」）

⑫元亀２年（1571年２月13日）武田信玄、駿河深沢城攻撃に参加した中山の金山衆10人に籾150俵を与える。（静岡県史「資料編中世２－4311」）

⑬元亀２年（1571年10月３日）武田信玄と北条氏政は「甲相一和」と呼ばれる同盟を復活。（静岡県史「資料編中世４－381」）

⑭元亀３年（1572年５月23日）武田家、穴山信君に富士信忠が駿河国興津、穴原間に居住すること等について指示する。（「武田家朱印状写」河内領古文書）

⑮天正元年（1573年４月12日）武田信玄、信州駒場で死去。（53歳）

⑯天正２年（1574年１月16日）穴山信君、駿河国、平岡民部丞に諸役を免除する。（富士麓郷の棟別諸役を免除する。）（竹川文書「静岡県史２－436」）

⑰天正３年（1575年６月１日）武田勝頼、一条信竜らへの書状のなかで、穴山信君が駿河国、江尻へ移ることを告げる。（「908武田勝頼書状」関家文書）

⑱天正５年（1577年12月19日）穴山信君、竹河肥後守に駿河国、藤左衛門後家分を安堵する。（静岡県史中世４－1108「穴山信君判物」）

⑲天正６年（1578年７月20日）穴山信君、佐野次郎右衛門尉に駿河国、江尻城より朱印状を出す。（静岡県史中世４－1144）

⑳天正８年（1580年霜月13日）十右衛門跡職の安堵。（有泉昌輔手形）（竹河文書）

㉑天正10年（1582年３月１日）駿河国、江尻城主穴山信君、武田方から徳川方へ離反する。（家忠日記）

㉒天正10年（1582年３月13日）織田信長、柴田勝家らに武田家を滅ぼし、駿河、甲斐、信濃３国を版図に収めたことを伝える。（信長記15「織田信長朱印状写」）

㉓天正10年（1582年３月29日）織田信長、武田家遺領を諸将に分配し、駿河国は徳川家康領となる。
◎甲斐国→河尻与兵衛（秀隆）被下、但穴山（信君）本地文除之

中国四川省訪日団来館

中国四川省人民対外友好協会の一行が山梨県内を訪問したというニュースは、新聞やテレビ等で紹介されましたが、このうち、「四川省友好少年少女訪日団」の一行が町内の家庭に２日間ホームステイし、各施設の視察や久那土小学校の児童達との交流などを通じ友好を深められました。

本町滞在の最終日となった１月14日、一行13人が当館に入館されました。

元気良く、「こんにちは」とあいさつされた後、館長の案内で館内を見学し、そして楽しみにしていた砂金採りの体験。

砂金の採り方も通訳を通してからの説明だったにもかかわらず、器用に砂をすくい、砂金を見つけるたびに歓喜の声を上げていました。

出発時間が迫り、体験を切り上げなければならないのに、ますます面白さが増し、なかなか止められず、「あと１回だけ」と言いながら夢中で体験している子も見受けられましたが、出発時には、「ありがとうございました。さようなら」と元気よくあいさつされ、小ビンに入れた砂金を大事そうに抱えながら館を後にしました。

第２回/第３回特別展

奥隆行『郷土玩具』コレクション展開催にあたって

この度、第２回・第３回特別展として「奥隆行氏コレクション」による『郷土玩具』展を開催することになりました。当館では平成10年４月に第１回（下部写友会作品展）を開催して以来の特別展ですが、特別展は「資料館活動」の一環として、幅広く身近な素材に焦点をあてた内容で開催されるものですので、町民の皆様はじめ多くの県内外の皆様方の御観覧を頂きたく御案内申し上げます。

さて、第２回・第３回の特別展は山梨県都留市在住の奥隆行氏が収集した「郷土玩具」を同氏の御好意で公開することができました。

奥隆行氏は1921（大正10）年に都留市にて誕生。早稲田大学商学部在学中に「郷土玩具」に興味を持ち収集を開始しましたが、昭和17年10月に学徒動員で主計将校として南方へ出征、昭和21年に復員、父の後を継いで郵便局長の仕事につきました。しかし昭和24年都留市の大火で自宅や収集した玩具の全てを焼失。その後、昭和40年ごろから、郷土玩具への魅力消えやらず再び収集を開始、今では全国の郷土玩具数百点に及んでいます。

同氏の郷土玩具収集は、当初は旅の記念からでしたが間もなく旅の目的の一つとなり、玩具製作者のもとへも直接訪問するなど、熱のこもったものばかりです。

当然、郷土玩具にまつわる事情や歴史などを調べ、踏査する旅のなかからだんだんと点数が増していった様子が伺えます。ちなみに同氏は考古学者（山梨県考古学協会副会長）でもありますから、現場へ赴き収集することはごく当たり前、本当に楽しみながら資料収集の感覚で集めたものだといえます。

今回は、数百点におよぶ郷土玩具のなかから二つのテーマを設定させて頂き、第２回特別展『郷土玩具～金の彩り～』「平成12年４月１日（土）～５月７日（日）」と第３回特別展『民話と玩具たち』「平成12年５月13日（土）～６月11日（日）」としました。第２回の「金の彩り」は、色は人の生活から切り離せない存在であり、色そのものは、驚くほど多様な世界を生み出してきましたが、郷土玩具一つ一つにも、すばらしい彩りがみられます。とりわけ金色は古くから注目されてきた特別の色ですが、約200点あまりの「郷土玩具」の一部に見ることができましたのでそれを紹介します。

第３回の「民話と玩具たち」は想像以上に民話の伴う玩具が見られます。こうした視点から「郷土玩具」をみますと、正に民俗学的な面から歴史学へと発展しかねない魅力すら感じます。奥隆行氏が郷土玩具にひかれていった魅力はこの辺にあったのではないかと想像します。

最後に奥隆行氏の御協力に対しまして深甚なる謝意を申し上げ、特別展開催にあたっての御挨拶と致します。

館長
谷口一夫

編集後記

今年の冬は大雪にも見舞われず、少しほっとしていますが、例年に比べ降水量がずいぶん少ないので、水不足になりはしないかと気になるところです。

ここのところ暖かい日が続き、桜の開花宣言も聞こえてきました。いよいよ春本番ですね。まだ花粉の飛び具合も気になりますが、それでも日中は炬燵もいらないくらい暖かくて、外に出かけるのにも最適です。動きやすくなったこの季節、資料館へも遊びにおいでください。

この館だよりが「資料館」として発行する最後の号となりました。次号からは「博物館」としてふさわしいものとなるよう努めますので御指導ください。

資料館だより　第12号　平成12年３月30日
発行　甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
ＴＥＬ　0556（36）0015